

高校「家庭基礎」における保育領域の授業実践

—絵本製作教材の効果と課題—

村上 孝子*、井上 えり子**

(*京都教育大学大学院科目等履修生、**京都教育大学)

Classes of the Childcare in Home Economics in the High School
-An Effects and Problems of the Picture Book-

Takako MURAKAMI, Eriko INOUE

2016年11月30日受理

抄録：滋賀県内の私立K高校で2016年7月～11月に実施した「まわる絵本」製作の授業を通して、「家庭基礎」保育領域における絵本製作の効果と教材開発の課題を考察することを目的とした。その結果、効果として、①「まわる絵本」製作は短時間で作製することができ「家庭基礎」の教材としては適当である、②発達の授業との連携を図ることができ子どもの発達に関する知識理解が深まる、③物語や絵の作製を通して創造性や表現力が培われる、④読み聞かせの活動を通じて生徒が互いに多様性を認め合うことができる、の4点が明らかになった。一方、①台紙作製の指導方法を改善することでより簡単に美しく作製できる、②ここでは様々な制約により作製した絵本を使って乳幼児と交流するといった活動が出来ないため、それを補う教材が必要、③発達の授業とのつながりをさらに充実させる工夫が必要、の3点が課題として残された。

キーワード：高校家庭科、保育学習、「家庭基礎」、六角返し、まわる絵本

I. はじめに

絵本は子どもの発達を促す児童文化財である。1980年代から1990年代の高等学校家庭科における絵本に関する実践をみると、基本的な生活習慣を育てる要素を組み入れた布絵本の製作とその活用例¹や絵本の世界をテレビと対極にあると位置づけた手作り絵本の授業展開例²が紹介されている。こうした実践は、児童文化財としての絵本の価値を理解させるとともに、製作活動を通じて生徒自身が思考や感性を表現することにより、達成感を得ることができ、保育に関する生徒の課題意識の形成や学習内容の総合的な把握につながると考える。

しかし、2003年に「家庭基礎」2単位が置かれ、多くの学校が「家庭総合」4単位ではなく「家庭基礎」を選択するようになり、家庭科の時間数が大幅に縮小されることとなった。また、中学校家庭科でも絵本製作は行われており、時間を要する絵本の製作をあえて高校家庭科で取り組むためには、その教育的効果を十分に検証する必要があると考える。

近年の絵本製作実践では、作製した絵本を保育所や幼稚園に訪問する際に生徒が子どもたちに読み聞かせたり、プレゼントしたりする実践が少なくない。また、コンピューターを使って製作することで、作製時間や生徒の表現力の不足を補って意欲的に作品に取り組ませる実践もある³。加えて、今後、アクティブ・ラーニングを推進していくために、高校家庭科で絵本製作を取り入れる学校が増加する可能性もある。しかし、上述のように、絵本製作自体は中学校で経験している可能性があり、高校保育領域で取り扱う子どもの発達の視点が組み込まれた指導計画でなければならない。また、コミュニケーション能力や裁縫技能の育成など複数の能力の育成を目指すとしても、中心となる子どもの発達の視点が明確でないと、何のための学習か不明瞭になってしまう。さらに、「家庭基礎」で行う場合は短時間でできる教材の工夫が必要とされるが、有効な教材を開発することができてい

ないのが現状である。

以上の課題意識から、筆者（村上）の勤務校（滋賀県内の私立K高校）で行われている絵本製作の授業を素材にして、「家庭基礎」保育領域における絵本製作の効果と教材開発の課題を考察したい。

Ⅱ. 結果

1. 保育領域における指導計画について

K高校の学級数は1学年9から10クラスであり、学級人数は約30人から40人である。家庭科教員は2人で、筆者（村上）は3クラス（92人）を担当している。科目は2年時の「家庭基礎」2単位のみで選択科目は置いていない。授業は2時間連続で行われ、講義1時間、実習1時間の構成を基本としている。使用する実習教材は教員2人で相談して決めており、今回検討する絵本製作教材（「まわる絵本」）は主任教員の発案により、2015年度から実施している。

保育領域の指導計画は表1に示したように全9時間である。但し、時間割編成上の理由により10時間ないし11時間に時間数が増加したクラスもある。2016年度の実施時期は2016年7月～11月である。

表1 保育領域指導計画 全9時間

時期	内容	時間	内容説明
1学期	事前指導 夏休みの課題		絵本の作製について説明する。図案記入用紙を渡し、夏休みの宿題にする
2学期	1. 「まわる絵本」の台紙作り	1	画用紙を絵本の形に作りページを付けておく
	2. 子どもの育つ力を知る（1）	2	誕生・赤ちゃん・身体の発達・発達の原理
	3. 絵本の下絵描き	1	台紙に下絵を写す。夏休みの宿題回収
	4. 子どもの育つ力を知る（2）	1	愛着・知的能力と言語の獲得
	5. 絵本の色付け・完成提出	1	色鉛筆・提出用紙に絵本の意図や工夫点を記入
	6. 情緒と社会性の発達	1	情緒と社会性の発達・幼児教育の原則
	7. 絵本の発表	1	班で読み聞かせをし合い、その意義を交流する
	8. 子どもの育つ力を知る（3）	1	遊び・保育環境の変化と課題・親子関係・まとめ

奇数番号は絵本作製の時間。保育に関わる学習はこの他に家族学習（「家族・保育の現状と課題」1時間）、調理実習（「幼児のおやつ」2時間）がある。

生徒は、1学期の家族領域の中で保育の現状や課題について学習しており、2学期の保育学習はそれらの学習を踏まえて行っている。授業は複数の教員で担当しているので、教材は各担当者が創意工夫した教材と共通教材の2種類を使用している。共通教材は、実習が「まわる絵本」、講義では教科書に即した課題プリントである。

「まわる絵本」については、1学期末に事前指導を行い、絵本の図案の作製を夏休みの課題にしている。絵本は3時間で作製し、4時間目にクラスで読み聞かせを行い、絵本の作製や読み聞かせの意義を生徒に考えさせる。講義は子どもの発達を中心に4時間である。

この他に、2学期は「幼児のおやつ」を題材とした調理実習を行う。生徒は、手作りのおやつ（豆腐白玉とさつまいもの茶巾絞り）作りを通じて、子どもの食生活についても学んでいる。

2. 子どもの発達に関する授業について

先述のように、講義では、担当者が工夫した教材と共通教材の課題プリントを使用している。筆者（村上）は共通教材は生徒の空いた時間（作業が早く済んだなど）やテスト前などの自習課題として使用しており、講義は自作のプリント教材を中心に進めている。表2はその内容を示したものである。

1時間目では、3枚の顔の絵（目鼻口がないもの、目鼻口の位置が誤っているもの、正常なもの）を見せ、人は本能として光る目を見るようにできており、コミュニケーション能力を備えていることを実感させる。また、新生児の人形を一人ずつに抱かせて重さや抱き心地を体感させる。ほとんどの生徒が乳児に触れる機会や経験がない中で、人形を使うことにより、生徒の意識と注目を新生児の学習に集中させることができる。ここでは新生児の身体発達の特徴をおさえ、自分が育ってきた環境や周りの人との関わりを振り返るよう指導する。

表2 発達に関する授業の内容

学習活動と内容 時間数	指導上の留意点
1.子どもの育つ力を知る(1) 2時間 ・子どもの発達過程 ・生まれるということ ・赤ちゃんの育つ力 ・身体発達の特徴 ・発達の原理	・人の一生の発達過程とその名称を押さえ、乳幼児期は特に一生を左右する大切な時期であることを強調する。・新生児の生理現象について紹介する。・乳児の人形を一人一人に抱かせる。・「人間は生理的早産である」意味を問う。・新生児の能力である「原始反射」や「五感」や「母乳の意義」について説明する。・乳幼児の身体の特徴と発達の過程や自分との比較をする。・「スキヤモンの発達曲線」「発達には個人差があること」「発達は個体と環境の相互作用であること」など発達の特徴を整理する。・自身が育ってきた環境や周りの人との関わりを振り返る。
2.子どもの育つ力を知る(2) 1時間 ・心の発達 ・愛着 ・知的能力の発達 ことばの発達 ことばと文字 ことばは思考の道具 知的能力のいろいろ 認知発達の段階	・泣くことで赤ちゃんが伝えたいことは何かを考え、それを放置することと叶えることの意味を発達の視点で捉える。・抱っこや赤ちゃんとの応答が精神の安定をもたらす、その後の意欲につながる説明をする。・明橋大二著『子育てハッピーアドバイス』（万年堂出版、2006年）より抜粋した文章を紹介、抱っこなどスキンシップの大切さに触れる。・愛着形成がその後の精神の安定や意欲につながり、人生の土台になることを強調する。・実際にはない言葉「チュルガロバロニー」などの説明を求め、どのように解説するか実験する。・次に全員が体験している「カレー」について説明させ、言葉はどのように獲得してきたものなのか説明する。・文字の記号を変え、文字の実験をする。・言葉は思考の道具であり、具体的な体験を通して身につけてきたことを自覚させる。・ 絵本作製では様々な能力が求められたが、知的能力にはいろいろあることに気づかせる。 ・認知発達は段階的に変化することを、「ピアジェの発達段階」で説明し、高校生に育ちの自覚を促す。
3. 情緒と社会性の発達 1時間 ・幼児教育の原則	・「感情は思考のエネルギーである。思考は感情のいれものである」という言葉について考えさせる。情緒、言葉、経験、社会性は互換性があることを考えさせる。・発達段階に応じて、人見知り、探索行動、自我のめげえ、しつけ、第一反抗期、友達遊び、自己統制、忍耐、良心という過程をふみつつ、就学に備えることを説明。・「欲求」「経験」「言語」の三つの積み木で、理想型、口さき型、動物型の育ち方を説明し、現在の子どもの置かれている状況はこれでいいのか問いかける。
4.子どもの育つ力を知る(3) 1時間 ・遊びの発達 ・親として共に育つ	・ 絵本は受動遊びであるが、遊びの発達について教科書で確認する。 ・ 絵本とテレビはどこが違うか、「スマートフォンによる子守」は何が問題なのか考え、意見交流する。 ・親子関係の発達についてふれ、現在の関係を表現させる。・ドロシー・ローノルト、レイチャル・ハリス著『子どもが育つ魔法の言葉』（PHP文庫、2003年）より「子は親の鏡」を読み、共感できるところを2つマークする。・保育領域のプリントをまとめ提出させる。

ゴシック体は絵本作製と直接関連する内容

2時間目では、「赤ちゃんはどんな時に泣くか」、「泣いている子をほっておくとどうなるか」という発問を行い、生徒に乳児の思考について考えさせる。次に、「愛着」について考えさせるために、明橋大二著『子育てハッピーアドバイス』（万年堂出版、2006年）から抜粋した文章を読ませる。乳児の立場から考えることを通して、愛着形成の重要性を理解させる。乳幼児の知的能力の発達では、まず、実際にはない言葉「チュルガロバロニー」と意味のある「カレー」という言葉の違いを意識させ、言語の獲得過程について考えさせる。自己の能力は、自然に身につけてきたものではなく、多くの経験と周りの働きかけによって獲得されたことを理解させる。そして、認知発達は段階的に変化することをピアジェの発達段階説から説明し、高校生に育ちの自覚を促すよう指導する。

3時間目では、千葉康則、近藤薫樹著『子どもの成長と脳の働き』（有斐閣新書、1980年）を参考に、主観的認識について考えさせる。近藤氏が指摘するように、沸き起こる欲求は意欲に繋がり、豊かな経験は何者にも勝る財産となる。それを言語に表現することで他者にも未来の自分にも生かすことのできる知識となり、主観的認識の基礎を形作る。このことを考えさせるために、「欲求」「経験」「言語」の三つの積み木を使い、生徒に「理想型」、「口さき型」、「動物型」の三つの育ち方を示す。「理想型」は、「要求」に根ざした「経験」を重ねそこから「言語」の発達が促されるバランスのよい発達である。これに対し、「口先型」は「経験」が圧倒的に不足しており、「動物型」は「要求」が制御されず「経験」や「言語」の発達に乏しい。これをもとに、現在の子どもの置かれている状況はこれでいいのかを考えさせる。

4時間目では、前時に絵本製作のまとめとして絵本の意義を学習していることを踏まえ、子どもの遊びに関する現代的課題を考えさせる。具体的には、テレビやスマートフォンによる子守と絵本の違いを考えることで、その背景にあるものは何か、よくない点は何かなどを考えさせる。そして、ドロシー・ローノルト、レイチャル・ハリス著『子どもが育つ魔法の言葉』（PHP文庫、2003年）より抜粋した「子は親の鏡」を読み、自己の育ちを振り返るとともに親の気持ちを考えさせる。

以上のように、講義では、乳幼児の発達に関する理解を深めるために、実物教材やプリント資料を工夫して授業を行っている。とくに、生徒自身が自己の成長を振り返り、未来にむけて準備できるよう、思考を促したり、クラスで交流する活動を重視している。また、4時間目に、テレビやスマートフォンに子守をさせるといった事例と絵本の違いについて考えさせることで、絵本製作との連携も図っている。

3. 絵本製作教材「まわる絵本」の授業について

「まわる絵本」とは伝承あそびの六角返しに物語のある絵を描かせたものである。六角返しは、長方形の画用紙に正三角形を10個つくり、図1のように六角に折り最初と最後を貼り合わせることによって、3面の絵が出るようにしたカラクリおもちゃである。

六角返しは2016年発行の中学校家庭科教科書⁵に作り方が紹介されており、小学校の図画工作科などでも教材として使われている。一般には3面に好きな絵を描いて折るたびに絵が替わることを楽しむカラクリおもちゃとして作られるが、本研究では、絵に物語を付加することで絵本として使えるようにし、「まわる絵本」と呼んでいる⁶。本教材を選択した理由は、①絵が3面で絵画製作に時間がかかり過ぎない、②画用紙

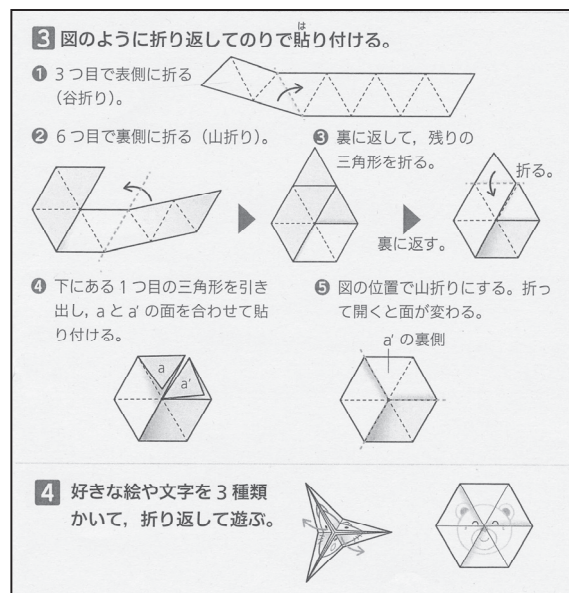


図1 六角返しの作製方法（出典は脚注に記載）⁴

を使用することで扱いやすく入手しやすい、③おもちゃの要素が加わる、からである。

物語としては、通常、起承転結の4面が必要であるが、これまで「家庭基礎」で4面の絵本作りをした経験では時間がかかり、時間の制約上3面（序破急）の本教材を選択した。また、画用紙は扱い易く時間短縮に繋がる。さらに、おもちゃの要素が加わることで、子どもにとっての遊びの意義を意識することができると考えた。

表3 絵本製作実習と授業の内容

学習活動と内容 時間数	指導上の留意点
<u>夏休みの課題</u> ・保育領域の学習の意義 ・「まわる絵本」とは ・「まわる絵本」の下絵と物語の作製	・夏休みに入る前に2学期の授業と実習内容を説明する。・物語のある作品になるように指導し、絵本の下絵と物語を夏休みの課題とする。・子どもの頃の絵本体験を思い出したり、絵本の素材になる出来事はないか調査や観察をするよう助言する。
<u>1. 絵本の台紙作り 1時間</u> ・作り方の説明を聞く ・画用紙と型紙を配布 ・各自で製作し随時質問 ・完成した台紙を提出	・時間短縮と作品の大きさを揃えるため、予め型紙を印刷して配布する。・実演、説明しながら一斉に作業をさせる。・台紙を回収し、点検し、失敗はやり直しをさせる。
<u>2. 下絵描き 1時間</u> ・台紙に図案を3面とも写す。	・夏休みの課題を回収し絵本の下絵を点検評価する。・下書きの段階で作業状況に差ができるが、早い生徒には、線や色がクリアーになるようになどの指導を入れる。・作業に余裕があれば、指先の発達や発達による絵の変化、図形の認識力などの話をする。・台紙を回収する。家での作業は認めず集中して取り組む事を促す。
<u>3. 絵本を仕上げる 1時間</u> ・色を付け絵本を仕上げる ・提出用紙に解説と全体の趣旨および感想を書いて作品とともに提出。	・作業は個人差があるので、仕上がった生徒から提出させ、講義プリントの裏につけた課題に取り組みさせる。・時間を区切り、未完成のものは最終的には宿題とする。・完成品を評価する。
<u>4. 絵本の交流発表 1時間</u> ・4～5人の班で互いに自分の作品を読み聞かせをする。・読み聞かせを終えた後、班で絵本の意義について感じた事を出し合う。・クラス全体で意見をまとめる。	・机を班形式に移動させる。・班の中で役割（司会・記録・発表）を決める。・幼児の対象年齢を設定して読み聞かせをさせる。・絵本の意義を子どもと親のそれぞれの立場から考えるように促す。・最後に実物投影機を使って良い作品を生徒に紹介させ、コメントを加える。

ゴチック体は講義の内容と関連した指導

夏休み前に、2学期の保育の授業内容を説明し、絵本の筋書きと下絵作りを夏休みの課題とした。簡単で単純な作品ではなく、よく考えられた筋書きがある作品になるように指導し、絵本の下絵と物語を夏休みの課題とした。製作にあたっては、子どもの頃の絵本体験を参考にしたり、絵本の素材になる出来事はないか調査や観察をするよう助言した。

第1時間目は絵本の台紙を作製させた。今回は時間短縮と大きさを揃えるため予め型紙を印刷して配布したが、型紙の寸法に誤りがあることに気づかず配布したことや強度をもたせるために画用紙を二重にして作製したことなどが原因となり、正しく作れない生徒が多かった。画用紙を間違っって切ってしまう、紙のたたみ方が間違っ

まま糊付けしてしまう、折り線がいくつもついて美しくないなどの誤りである。指導の誤りはすぐに正し、生徒の失敗は再度指導して正しい台紙を全員に作製させたが、このことから厚手の画用紙1枚で型紙を使わず作製させることでより簡単に美しくできることが判明した。

2時間目は、台紙に下絵を写させる。この段階で作業状況に個人差が生じる。すぐに色塗りまで仕上げてしまう生徒には細部まで丁寧に作品を仕上げるよう指導する。自宅での作業は認めず、集中して取り組むよう促す。ここでは、絵本製作には育ってきた過程で身につけてきた様々な能力が活用されていることを説明するとともに、自分で完成させることにより達成感を感じ、作品に対する愛着が生まれることを確認させる。

3時間目は、仕上げである。自分の好む画材で色を塗り、作品によっては文字を入れて絵本を仕上げる。提出用紙にページ毎の解説と全体の趣旨や感想を記入させ、作品とともに提出させる。作業にはどうしても個人差ができるため、仕上がった生徒は全クラス共通の課題プリントに取り組みさせる。授業時間内に完成できなかった生徒は持ち帰りを許可し自宅で完成させる。

4時間目は、作製した絵本の交流発表である。4～5人の班で互いに自分の作品を読み聞かせる。この時、幼児の対象年齢を設定して、読み手にも聞き手にも子どもの発達段階を意識させる。読み聞かせを終えて、班で絵本の意義について子どもと親のそれぞれの立場で考え、クラス全体で意見をまとめる。最後に実物投影機を使って生徒に良い作品を紹介させ、コメントを加える。作品は提出させ、図書館にすべて展示する。

以上のように、本授業では、絵本の物語と下絵を夏休みの課題とし、3時間で作品を完成させ、1時間で交流を行った。作品を時間内に完成した生徒が9割以上を占めており、教材としては妥当であったと考える。また、製作過程では、絵本製作には自分たちが育ってきた過程で身につけてきた様々な能力、例えば、指先の発達、描くことのできる絵の発達、図形の認識能力の発達、物語を創造する力、ことばで伝える力などが活用されていることを説明し、理解させるよう指導した。加えて、絵本の交流発表では幼児の発達段階を意識させるとともに、互いの作品の良いところを評価するよう助言した。

4. 生徒の作品分析

絵本を作製した後、生徒に作品の自己評価についての簡単なアンケート調査（有効回答数72、回収率93%）を行った。調査の内容は、①忘れ物（なし、忘れたことがある、よく忘れた）、②時間内に完成したか（余裕があった、できた、できなかった）③絵本の台紙作製（上手に出来た、出来た、失敗した）、④内容やデザイン（オリジナル、参考作品をアレンジした、参考作品を写した）である。

忘れ物については製作に対する準備や意欲が反映されるが、76%（55人）が忘れ物が全くなかったと答えており、ほとんどの生徒は意欲的に取り組んでいたといえよう。時間内に完成した生徒は93%（67人）である。このように、3時間でほとんどの生徒が完成させることができる教材である。

前述のように、台紙の作製は指導上のミスがあり、台紙を失敗した生徒が24%（17人）になった。この点については今後、型紙を使わず作製させるなどの改善が必要である。ただし、指導上のミスの問題だけでなく、日常的に物を作るという行為を行わないため、書く、切る、折る、貼るなどの手作業を美しく仕上げることができなかったのではないかと推察され、この点においても指導の工夫が必要であった。

内容やデザインについては、「オリジナル」と答えた生徒が76%（55人）でもっとも多く、次いで「アレンジ」が21%（15人）、「写した」が3%（3人）であった。ほとんどの生徒が自分で物語りや絵を考え工夫していたことが確認できた。

作品（論文執筆時に提出されていた89作品）から絵本を分析すると、題材は次の5つに区分される。①人間27作品（子ども、老人、仲間、夫婦など）、②日常の物や食べ物24作品（りんご、アイスクリーム、クレヨンなど）、③動物23作品（うさぎ、龍、豚、小鳥、青虫など）、④自然10作品（植木、花、穴、宇宙など）、⑤漫画5作品

(ドラえもん、ポケモン、ガンダムなど)である。①②③が多く④が続き⑤は僅かであった。自分の身近なものに題材を求めたことが伺える。また、漫画のキャラクターを使った作品は少なく、自分のオリジナルな表現を試みようとしたことが確認された。

物語の主題は、①暖かい気持ちにさせることを狙ったもの25作品、②教訓を伝えるもの21作品、③現実の出来事などを伝えるもの23作品、④夢や驚きを伝えるもの15作品、⑤ブラックユーモアを含む大人向きもの5作品に分類された。幼児対象の絵本作りなので大人向きの内容は少なく、暖かい気持ちを持てたり、教訓を伝えるなど絵本として相応しい主題に取り組んだことがわかる。

物語の構成は、①変化64作品(大きくなる、季節が変わる、出会うなど)、②意外性22作品(最後にどんでん返し、思わぬ展開、予想を覆すなど)、③種類3作品(同じテーマの違うものを3つあげる)に分類された。課題を出す時点で、単純な羅列ではいけないと指摘しておいたので必然的に変化や意外性のあるストーリー構成となっていた。

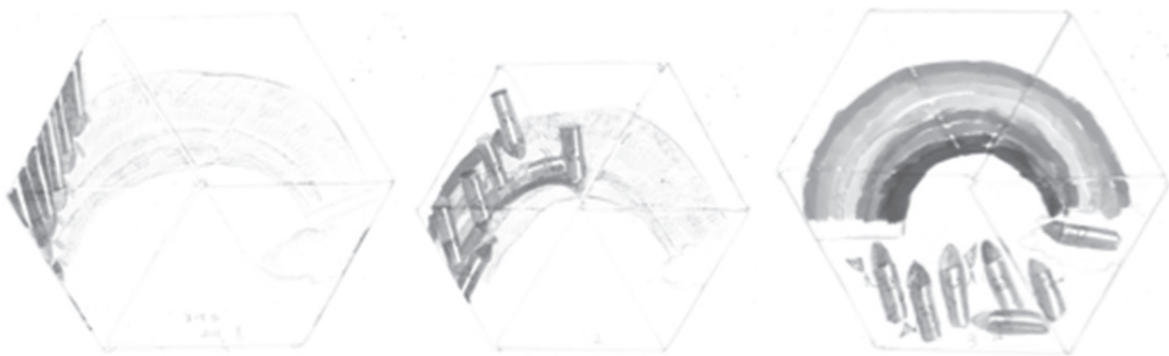
作品とともに提出させた感想文(85人)を分析すると、工夫した点として、絵や色の表現を挙げる生徒が49人と最も多く、次いで、ストーリー構成が21人、台紙作り13人と続いた。生徒はストーリー構成以上に絵や色使いなどの表現に最も苦勞していることがわかる。

以下に作品例を紹介したい。

これは、アイスクリームを題材とし、溶けると、あたりのバーが現れて、またアイスが貫えまわり続けるというストーリーである。日常の物や食べ物を題材にし、ねらいとしては驚きを表現し、アイスの形状の変化を示した作品である。まわる絵本の構成上の特徴を生かした意図がよくわかる作品である。



次は、クレヨンのレースという作品である。クレヨンを見立て、「並ぶ順位が決まって悔しい思いをしたひといますが、彼らが走った道には美しい虹が生まれました」というストーリーになっている。ねらいとしては暖かい気持ちを伝えるもので、虹が形成される表現に色や形の美しさが現れており工夫が感じられる。



このように、提出された生徒作品は、ストーリーや絵画表現に工夫が施されたものが少なくない。絵本の製作を通じて、何を題材に選び、序破急の筋書きを考え、どのような絵に表現するか、など創造性や表現力が培われることが確認された。また、生徒の楽しそうな様子から、製作の中で表現することの面白さや作品の読み聞かせの活動を通じて生徒が互いに多様性を認め合う事の面白さを経験した点もこの教材の教育効果として指摘しておきたい。一方で、少数であるが、既存の漫画のキャラクターを写したり、十分にストーリーが考えられていない作品もみられた。こうした生徒に対する指導が課題として残された。

5. 発達の授業と絵本製作教材の関連について

先述したように、「まわる絵本」のねらいは、「1. 絵本製作の中に自分の生育過程で獲得してきた能力の多くが含まれていることに気付く。」と「2. 絵本が子どもの発達を手伝う文化財であり、コミュニケーションの媒体であることを体感する。」の2点であった。ここでは、発達の授業で学んだ内容を自分自身の成長に対応させて掴むことが課題となる。さらに、自分の作品を使って絵本の読み聞かせを行うことを通して、文化財やコミュニケーションとしての絵本の役割を理解することが不可欠である。

これらの課題に対しては、先述のように、作製作業の進行状況を見ながら、絵本製作には自分たちが育ってきた過程で身につけてきた様々な能力、例えば、指先の発達、描くことのできる絵の発達、図形の認識能力の発達などが活用されていることを説明し、理解させるよう指導した。また、絵本の読み聞かせの場面では、幼児の対象年齢を設定して読み聞かせをさせたり、絵本の意義を子どもと親のそれぞれの立場から考えるように促す指導を行った。

こうした工夫を行っているものの、ここでは様々な制約により、作製した絵本を使って実際に乳幼児と交流するといった活動がない。このため、子どもの発達についての体験を通じた学びが不足していることは否めない。今後は、例えば、生徒が作製した「まわる絵本」を異なる年齢の幼児に読み聞かせし、その反応をビデオや写真などで教材化し、生徒に見せるなどの工夫が必要であることが確認された。

Ⅲ. おわりに

本研究では、滋賀県内の私立K高校で行われている絵本製作の授業を素材にして、「家庭基礎」保育領域における絵本製作の効果と教材開発の課題を検討してきた。

筆者らは、絵本製作においても製作それ自体が目的になるのではなく、子どもの発達の視点が導入された教材であることを前提として指導計画を作成した。また、「家庭基礎」で行うために短時間でできる教材の工夫を模索してきた。その結果、成果としては以下の4点が明らかになった。

第1は、「まわる絵本」製作は短時間で作製することができ、時間的には「家庭基礎」の教材としては適当であることが明らかとなった。

第2は、製作の目的を自分の生育過程で獲得してきた能力に気づき、自分の発達を理解することにおくことで、発達の授業と製作の連携を図ることができ、子どもの発達に関する知識理解が深まる点である。

第3は、物語や絵の作製を通して創造性や表現力が培われることが確認された点である。小さな作品であるが、高校生にとって日常生活でモノをつくる経験が減少してきたため、こうした機会は貴重であるといえよう。

第4は、読み聞かせの活動を通じて生徒が互いに多様性を認め合う事の面白さを経験した点である。作品は多様性に溢れ、読み合わせをすることにより、お互いの多様性を認め合う場となった。

一方で、課題としては、以下の3点が指摘できる。

第1に、型紙を使わず作製させることでより簡単に美しくできることが判明した点である。画用紙を二枚重ね

にしたり、型紙を使った方法が難易度を上げる結果となってしまった。今後は、これらの点を改善し工夫することが必要である。

第2に、本研究では作製した絵本を使って実際に乳幼児と交流するといった活動がない。これについて、生徒が作製した「まわる絵本」を異なる年齢の幼児に読み聞かせし、その反応をビデオや写真などで教材化し、生徒に見せるなどの工夫が必要である。

第3に、発達の授業と「まわる絵本」製作の授業のつながりをさらに充実させる工夫が必要である。授業の中で繰り返し、絵本製作と発達の学習を結びつける発問や説明を加える必要がある。

今後は、明らかになった課題を解決するための教材開発を続けていきたい。

注

- 1 『高等学校家庭科実践指導事例集』教育図書、1987年、p307
- 2 『共学実践にもとづく家庭科展開事例集Ⅱ』一橋出版、1993年、p84
- 3 先生のためのWebサイトジャストスクール、実践事例レポート、中・高校の実践事例「家庭科にパソコンを積極活用 中学生から園児に絵本の贈り物～子どもたちの感性が光るオリジナル絵本作り～」新潟県・新潟市立白新中学校http://www.justsystems.com/jp/school/academy/report/jh/j_003_1h.html、最終閲覧日2016年11月22日
- 4 『新編 新しい技術・家庭 家庭分野 自立と共生を目指して』（東書 家庭724）東京書籍、2015年2月27日検定、2016年2月10日発行、p.197
- 5 同上
- 6 製作方法については、横山正、山村あずさ、大類研治『絵本作りクラブ まんが・イラストクラブ』ポプラ社、1999年を参照した。

